

サンケイ新聞社

蒋介石秘録

第三巻

— 中華民国の誕生

戦後三十年が経った。第二次世界大戦のドラマを、歴史学や国際関係論の枠組のなかで、冷静に再検討し得る時間的間隔がようやくもてるようになったのである。

そうしたなかで、二十世紀の世界史に巨大な問題を投げかけたつづけた中国

革命の壮大なスベクタクルを想うとき、蒋介石の位置はあまりにも重要である。

蒋介石の死と

いう事実の重みと相俟って、サンケイ新聞が総力を結集して『蒋介石秘録』を刊行しつつあることの意味は、今日また格別たといわねばなるまい。

その第三巻としての本書は、清朝を打倒した辛亥革命前後の激動を綴っている。辛

亥革命については、これまでも多くの書があるが、本書は、中国の当時の国際関係、すなわち列強の中国への野望や、その角逐が生きて描かれているという点で強い迫力をもっている。

萱野長知や頭山滿、寺尾亨た。

列強の野望

生き生きと

など革命に参じたわが国の覚志士の実像、滿蒙独立をめぐる日露の策略と対立、日本の歴代政府の袁世凱政策、東三省問題などが、若き日の蒋介石の足跡とともに述べられており、現代史の史料としての意味をもっている。

私は、この冬、ウランバー

トルから内蒙古を経て北京を訪れただけに、モンゴルをめぐる中露の歴史的对立や、モンゴル大皇帝「チエフツンダ」のロシアとの関係、川島浪速の滿蒙独立運動についての記述がとくに興味深かつ

本書によつて辛亥革命の当時から

東北、外蒙古、チベットは、中国と

列強の角逐の原動力であったことを知れば、今日の中

対立の根深さを理解することでもきよう。

中国革命の史実を知らずしてアシアを語ることはできないだけに、本書を若い人びとに推薦したいと思う。

(サンケイ新聞社・八八〇

円)

東京外大助教授 中嶋 嶺雄